

## 4 学年次生に対する卒業時のアンケート集計結果のまとめ

- アンケート実施日：令和2年1月17日
- アンケート配布数：95部
- アンケート回収数（率）：92部回収（96.8%） \*欠席1名、未提出2名

### I. 看護学部のカリキュラムおよびシラバスの構成について

カリキュラム評価に関する項目で、「そう思う」及び「少しそう思う」を合わせて80%を超えたものは、23項目中21項目であった。特に、「看護について理解が深まる学習内容が充実している」(98.9%)が最も高く、「健康について理解が深まる学習内容が充実している」(97.8%)と「実習の施設は充実している」(97.8%)の評価が高かった。また、昨年度のアンケート結果で最も高かった「教養科目群、専門科目群、看護学専門科目群のバランスは適切である」(96.7%)の割合に、若干の低下がみられた。加えて、昨年度のアンケート結果で70%後半であった「国外の看護実践に目を向ける学習内容が充実している」と「国際的保健・医療活動に目を向ける学習内容が充実している」において、今年度はともに60%への低下がみられた。

一方、「授業科目の配置」と「実習の開講時期」、そして「実習のプログラムは充実している」の全ての項目で89%を超える評価であり、特に「実習プログラムの充実」(96.7%)の評価が最も高かった。また、シラバス（授業計画）の記載に関する項目で、内容のわかりやすさと成績評価基準の明示に関するものについては、共に90%を超えており高い評価であった。また、昨年度81.3%であった「学生の個性を伸ばす教育方法が工夫されている」の割合が88%であり、若干の評価の向上がみられた。

### II. 看護学部のディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の達成状況の自己評価とその根拠について

看護学部のディプロマ・ポリシーの達成状況の学生の自己評価については、「そう思う」が50%以上であったのは【4. 看護専門職者として倫理的に思考することができる】の53名(57.6%)であった。根拠の記述内容としては、「倫理への意識・姿勢」「倫理について話し合う機会」「実習を通しての倫理の学び」に分けられた。「そう思う」が40%以上であったのは【9. 看護専門職者として対象となる人々と共に健康と幸福を追求し人間的に成長しようとする態度を示すことができる】の45名(48.9%)であった。根拠の記述内容としては、「大学生活を通しての成長」「講義・実習を通しての成長」に分けられた。次に、【7 あらゆる職種で成り立つ保健・医療・福祉のチームメンバーと信頼関係に基づき、協働することができる】は44名(47.8%)であり、根拠の記述内容としては、「多職種およびメンバーを通しての協働の学び」「学習の積み重ね」に分けられた。次に、【1. 看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる】は41名(44.6%)であり、根拠の記述内容としては、「自ら進んで学習する姿勢・態度・行動」「課題や試験による学習への取り組み」「看護専門職者としての自覚をもった実習での取り組み」「学習環境と形態」に分けられた。

自己評価の根拠の記述内容から学生は、大学生活や講義・演習・実習を通して学習を積み重ねていく中から、「自ら進んで学習する姿勢・態度・行動」を身につけるとともに学生同

士のメンバーシップを活かし、「看護専門職者としての自覚をもった実習での取り組み」へと変化（成長）している様子が見えてきた。

他方、【2. 看護専門職者として必要な基礎的な知識を身につけている】は「そう思う」が37名（40.2%）であり、根拠の記述内容としては、「学習に対する姿勢・態度・行動」「学習内容」「学習の積み重ね」「国家試験に向けての学習」「学習環境と形態」「学習による変化（成長）」に分けられた。「そう思う」が40%未満であったのは、【6. 看護専門職者として必要な基礎的な看護実践能力を身につけている】の34名（37.0%）であり、根拠の記述内容としては、「看護実践能力を身につける機会」「学習の積み重ね」「看護実践能力のレベル」に分けられた。次に、【5. 看護学の基本概念である人間、健康、環境、及び看護について体系的に理解している】は33名（35.9%）であり、根拠の記述内容としては、「看護学の基本概念を学ぶ機会」「看護学の基本概念の理解内容」「看護学の基本概念の理解のレベル」に分けられた。「そう思う」が30%未満であったのは、【8. 看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている】の26名（28.3%）であり、根拠の記述内容としては、「意欲をもっている」「今までの学びを活かそうと思っている」など前向きな記述と「意欲がそこまでない」という記述の両方がみられた。学生の自己評価の根拠の記述内容から、看護学の基本概念の理解や看護専門職者として必要な基礎的な知識及び看護実践能力については、学生が身につけるべきことをより具体的に示していく必要があると考える。

一方、学生の自己評価の「そう思う」の割合が最も低かったのは、【3. 看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる】の22名（23.9%）であり、根拠の記述内容としては、「学習による視野の広がり」「学習形態」「クリティカルシンキングの実践」「実習を通しての学び」「学習の積み重ね」に分けられた。自己評価の根拠の記述内容から学生は、学習を積み重ね「クリティカルシンキングの実践」を試みているが、思考する力が身についたと実感できるところまでは到達できていない様子が見えてきた。

### Ⅲ. 自律性について

安藤（2005）<sup>\*1</sup>の文献にしたがい、因子ごとに項目を並べ替えた。

自己決定に関する項目で、「あてはまる」及び「少しあてはまる」が最も多かった項目は、「16. 自分が興味を持ったことは、一生懸命やることができる」の85名（92.4%）であった。次いで、「あてはまる」及び「少しあてはまる」を合わせて70%以上であった項目は、「13. 自分で決めたことをやる方が、やる気がする」の68名（73.9%）、「9. 自分のは自分で決めたいと思う」の71名（77.2%）、「16. 自分が興味を持ったことは、一生懸命やることができる」の85名（92.4%）であった。反転項目である、「20. 大事なことは、だれか他の人に決めてもらいたいと思う」は「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」を合わせて32名（34.8%）であった。

「1. まわりから反対されても、自分がやりたいことをしたいと思う」は「あてはまる」及び「少しあてはまる」を合わせて55名（59.8%）であり、独立に関する項目の「17. 一人で決められないときには、誰かの意見が聞きたくなる」の81名（88%）や余剰項目の「7.

---

\*1 安藤史高（2005）：大学コミットメントと自律性欲求・学修動機づけとの関連，一宮女子短期大学紀要第44集，91-99.

他人の意見や流行を取り入れることが多い」の54名(58.7%)からも、物事を決定する時には他人の意見を聞き、最終的には自己決定していることがうかがえた。

独立に関する項目では、「8. 他人の言うことがたとえ正しくても、反論したくなる」が「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」を合わせて57名(62%)であり、余剰項目の「4. 自分でいいと思うならば、他人の意見は気にしない」の52名(56.5%)からも、他人の意見を聞くようにしていることがうかがえた。

#### IV. 看護学部での学生生活のサポートについて

16項目中、11項目で「そう思う」及び「少しそう思う」を合わせて80%以上であった。なかでも、学習環境の整備については、講義室、実習室、学生ホール、図書館、医心館とも、「そう思う」及び「少しそう思う」を合わせて80%以上であり、「講義室」「実習室」「医心館」は90%を以上であった。「そう思う」が最も多かったのは、「14. 国家試験対策は役立った」の59名(73.8%)であり、次いで「5. 国家試験対策は整っていた」の50名(54.3%)であった。学生生活のサポートについては、現在の体制整備で概ね良好であると考えられるが、「学食の環境は整っていた」は21名(69.6%)と低く、「就職支援対策は役立った」「大学生としてのマナー講座は役立った」「SNS講習は役立った」のいずれも80%を満たしていないため、今後、個別の案件に対応していく必要があると考える。

#### V. 看護学部での学生生活の満足度について

満足度について回答があったのは91名であり、「80~89%」が最も多く36名(39.6%)であった。1名が「40~49%」と回答しているが、理由は未記載であった。満足度「100%」と回答した学生は16名(17.6%)であり、満足度「80%」以上と回答した学生は64名(70.3%)であった。満足度の理由としては、大きく分けて、学修内容、学修の姿勢・態度、学修環境、実習、学生生活、部活動、学生生活を通しての成長、国家試験対策、就職支援体制、事務職員の対応、教員の対応の11項目に分類された。

学修内容、学修の姿勢・態度、学修環境について、「主体性を尊重した環境があった」「様々な先生の視点が学べた」「自分らしく学べた」「楽しく学べた」という意見がある一方、「同時期に講義がかたまりしんどかった」という意見もあった。また、実習について、「実習はしんどかった」意見があったが、「大変だったが、先生や友達に恵まれた」「部活と両立できゆとりあるカリキュラムだった」などの意見もあった。

学生生活に関して、友人関係を通しての肯定的な理由や学生生活を通しての自身の成長に関する理由が多かった。しかしながら、「駐車場代が高すぎて学生に厳しい」や「学食があまりおいしくない」「男子トイレが汚い」など、環境・設備面における意見があった。今後、引き続き、就職支援体制やアドバイザー制度による学生支援のあり方を検討するとともに、学生生活の満足度を高めるために、設備面の整備も課題であると考えられる。

#### VI. 看護学部でのカリキュラム、シラバスの構成、学生生活のサポートに関する意見要望 (自由記載)

看護学部での教育及び学生生活に対する意見・要望について自由記載で尋ね、回答のあった92名中21名(22.8%)から意見があった。記載内容は「実習の時期に関する意見」や「カリキュラム内容や進行に関する意見」、「保健師過程に対する支援」、「就職支援」、「その他」に分類された。なかでもカリキュラムの内容や進度に関する意見が多く、「1年次から看護の専門性を養う授業を入れて欲しい」ことや「国外に目を向けるための教育を充実させて欲しい」、「保健師実習の時期を早めて欲しい」などの意見があった。また、

昨年と同様、解剖実習を高学年で行って欲しいと意見があった。なお、昨年度のアンケート結果では「授業評価の仕方に関する意見」や「医学部による教員の授業が難しい」等の意見があったが、今年度はみられなかった。

学生生活については、満足した学生生活を送ることができたという意見が多かった。しかし、教員やアドバイザーとの関係性に満足できなかったという意見、就職支援の充実を求める意見があった。さらに、「実習でのパワハラはやめて欲しい」や「学生ホールのトイレが汚い」などの意見があった。今後、引き続き、学生が効果的にアドバイザー制度を活用できるよう検討するとともに、学生にとって快適な学修環境を整えていくことが必要であるとする。

#### <まとめ>

看護学部4学年次生に対して、カリキュラムおよびシラバスの構成、ディプロマ・ポリシーの達成、学生の自律性と学生生活に関するアンケートを実施した（回収率 96.8%）。

カリキュラムおよびシラバスの構成について、教養科目と看護学専門科目とのバランスは適切であり、学生の個性を伸ばす教育方法に対して評価が高かった。

しかし、看護における国際的視点を養う内容が不十分であるという評価は、昨年度と同様であった。

看護学部のディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の達成状況の学生の自己評価とその根拠の記述内容から学生は、大学生活や講義・演習・実習を通して学習を積み重ねていく中から、「自ら進んで学習する姿勢・態度・行動」を身につけるとともに学生同士のメンバーシップを活かし、「看護専門職者としての自覚をもった実習での取り組み」へと変化（成長）している様子がうかがえた。今後は、クリティカルシンキングの実践、看護学の基本概念の理解や看護専門職者として必要な基礎的な知識及び看護実践能力については、学生が身につけるべきことをより具体的に示していく必要があるとする。

本学部の学生の特徴として、他者の意見を聞きながら自己決定し、物事に一生懸命取り組むという自律性があることが示され、また、本学部における4年間の学生生活の満足度は平均 86.6%であり、高い割合で満足していた。

しかし、就職支援やアドバイザー制度を十分に活用できていないことが示されたことから、今後、検討していく必要がある。